

日本消化器外科学会雑誌編集後記

やっと 2011 年，平成 23 年が明けて 2012 年，平成 24 年になりました。皆様にとって昨年はどうな年だったでしょうか。そして今年をどんな年にしようとお考えでしょうか。

昨年は未曾有の大災害が発生し，日本国民のみならず世界中の人々が心を痛めた 1 年でした。私は地震発生時 17 階建病棟の 13 階にいて，大きな揺れに大変驚きましたが，患者や職員の安全に気を配るくらいの冷静さは保てていました。しかしその後，メディアを通じてどんどん伝わってくる現場の惨状にわが目を疑い，自分に今何ができるのか，何をしなければいけないのかを考える毎日でした。ちょうどそのころ，私の教室は日本在宅医療学会の準備に追われており，学術集会では是非東北の方々のご苦勞を伺い，広く発信し，学会としてできることを模索しようという意見が出ました。そして 6 月の学術集会では「東日本大震災に対する学会の役割」と題した緊急討論が設けられ，医師，薬剤師，看護師など 5 名の演者にそれぞれの立場から震災時の貴重な経験をご報告いただきました。参加者は生々しい経験談を食い入るように聞き入っていて，現場の貴重な声を心に刻み込みこんだ様子でした。学会として多少なりとも参加者のお役に立てたのではないかと考えております。東北の復興は進みつつありますが，まだまだ多くの方々が不自由な生活を強いられていると思います。医療現場でも医師不足や地域医療システムの崩壊など問題となっている事項も多く，時間経過によって問題の内容も変化しているようです。外科医系の学会が力を合わせて現場のニーズにあった支援を再考する必要があるのではないのでしょうか。

さて，本号は原著 1 編，症例報告 16 編，手術の工夫 1 編が報告され，いずれも精緻適切な考察がされており，皆さまの臨床に必ずお役にたてる情報と思います。また山本雅一先生より症例報告 2 編に対して貴重な Editorial をいただき，門脈奇形について，また肝切除時の脈管処理について臨床上留意すべき重要な点をご指導いただきました。特に手術の工夫については急速に広まりつつある腹腔鏡下单孔式手術について，独自の工夫で安全性を高めた手術が行われており，今後の腹腔鏡下手術発達の一助になるのではと思います。どれを拝見しても外科日常診療で出あうかもしれない症例ばかりで，本雑誌に毎月目を通すことの重要性を今更ながらに再認識いたしました。

本年もどうぞよろしく願いいたします。

(竹山 廣光)

2012 年 1 月 1 日